

# ラヴ・クック研究の動向

犬塚 悠太

## 0. はじめに

本論考はラヴ・アブラハム・イツハク・ハコーヘン・クック (Rav Abraham Itzhak HaCohen Kook: 1865-1935) に関する研究動向をサーヴェイするものである。この人物に関する詳細な情報は後述するが、彼はイスラエル建国以前のパレスチナにおいて活躍したユダヤ教の宗教指導者かつ思想家であり、後代の政治・思想潮流にも大きな影響を与えたラビであった。本稿ではラヴ・クックに関する英語による書籍および論文を整理しその研究動向を提示する。筆者の能力不足もさることながら、英語によって発表された研究が十分に厚いことや、重要な研究書・論文の英訳が存在していることから、今回はヘブライ語による研究書の参照を見送った。

### 0-1. 前提：シオニズムとクック研究の意義

サーヴェイを始める前に、まずシオニズムの諸潮流について概要を確認しながらクック研究をサーヴェイする理由を明らかにする。シオニズムと言う時に第一に名前の挙がるテオドール・ヘルツルのような、ユダヤ国家建設という政治的手段にユダヤ民族救済の道を見るものを政治的シオニズムと呼称する<sup>(1)</sup>。移住先としてパレスチナの地にこだわらず、「ウガンダ案」にすら同意したこと<sup>(2)</sup>からもわかるように、彼らは何よりもまずユダヤ人のための安全な住処として国家を作ることこだわった。またヘルツルと異なるシオニズム観の提唱者としてはアハド・ハアムが挙げられよう。彼の提唱した思想は文化的シオニズムと呼ばれ、世界中に離散したユダヤ人を一つの民族として統合する困難さから、ユダヤ民族の精神の源泉としてのイスラエル国家を要請した<sup>(3)</sup>。これら政治的シオニズム、文化的シオニズムは世俗的なシオニズムの潮流として位置づけられる<sup>(4)</sup>。そして市川 (2009) によれば改革派ユダヤ教徒にとっても正統派ユダヤ教徒にとってもシオニズムは拒否されるべきものであった<sup>(5)</sup>。

しかし、当然のことながらシオニズムをめぐる宗教者の態度は一樣ではなく、複雑な側面を持ち合わせている。実際に宗教的なユダヤ人たちの中でもシオニズムに同調する者も存在し、彼らの思想は「宗教シオニズム」と呼ばれている。この宗教シオニズムという言葉は Religious Zionism (ציונות דתית) の訳語であるが、日本では論者により若干表記や意味の別がある。例えば池田 (1991) は「宗教的シオニズム」「宗教的シオニスト」という言葉によって主にグーシュ・エムニーム<sup>(6)</sup>に代表される原理主義的な思想、集団を指す<sup>(7)</sup>。立山 (2018) は「宗教シオニズム」という言葉を宗教的な観点からシオニズムを肯定する潮流として使用している<sup>(8)</sup>。赤尾ら (2011) は「文化」をめぐって争ったシオニズムの潮流として、政治的シオニズムと文化的シオニズムに、宗教シオニズムを加え 3 つに分類する。そして宗教シオニズムは長らく穏健であったが、イスラエルの建国や六日間の戦争の勝利に神の意志を見出して以降、活発な入植活動を進め横暴に振る舞うようになったと述べる<sup>(9)</sup>。また、今野 (2015) は「宗教シオニズム」を以下のように説明する。

1967年戦争までは、ナショナリズムの規範に基づく労働シオニストおよびイスラエル国家との協調体制が宗教シオニズムの主流であった。だが、1967年戦争以降、宗教シオニズムの内部でロマン主義的・メシア主義的な領土拡張主義が肥大し、グーシュ・エムニーム率いる急進派が力を持ち、全体主義的傾向が強まっていった。<sup>(10)</sup>

これらの論者によって「宗教的シオニズム」、ないし「宗教シオニズム」という言葉で表されるものはクックやその息子のツヴィ・イエフダ・クック (Zvi Yehuda Kook: 1891-1982) の思想を引き継ぐ集団に加えて、正統派のユダヤ教徒でありながらユダヤ民族の命を守るための現実的な方策としてイスラエル国家建設を容認するライネス (Isaac Jacob Reines: 1839-1915)<sup>(11)</sup>などの思想家も含んでいる。後者は現実的な要請から、そして世俗主義者に文化的教育的側面の主導権をとられてしまうことへの危機感からシオニズムに参加した<sup>(12)</sup>ため、その思想を「宗教者による現実的シオニズム」と名付けることができよう。それに対し、筆者が焦点化したい宗教シオニズムは、過激主義と結びついて説明される前者の思想、すなわちシオニズムに神の救済としての宗教的意味を読み込む「活動的メシア主義シオニズム」<sup>(13)</sup>である。

そもそも「宗教者による現実的シオニズム」と「活動的メシア主義シオニズム」の両者が「宗教シオニズム」という言葉でまとめられてきたことに鑑みると、これまで使われてきた分析概念としての「宗教シオニズム」は「敬虔なユダヤ教徒によるシオニズム」に過ぎないものだった。これは世俗ユダヤ人によって担われたシオニズムがその思想や活動によって様々に名前をつけられていることと対照的である。また、「宗教」という言葉の有するコノテーションについても考える必要がある。アイゼン (2011) は、宗教と暴力というテーマに携わる研究者たちが、宗教シオニズムにしか目を向けず、世俗シオニストたちの暴力性やその背後にある宗教性を取り扱おうとしない点を、西洋キリスト教的なバイアスとして示し、倫理やナショナルアイデンティティと複雑に結びついたユダヤ教の特殊性を主張している<sup>(14)</sup>。つまり、シオニズムは元来宗教と世俗の対立軸では十全に説明されない思想・現象であり、世俗的とされるシオニズムと宗教としてのユダヤ教との関係は、むしろ複雑で動的な側面を持ち合わせている。そしてこの動的な一面を垣間見せてくれるのが、特に宗教と世俗ナショナリズムを統合しようとした<sup>(15)</sup>、「活動的メシア主義シオニズム」である。また、現代イスラエルではイスラエル国防軍に「活動的メシア主義シオニズム」思想を信奉する将校が増えてきていることもあり<sup>(16)</sup>、この思想は、近現代のユダヤ教およびイスラエルという国家の諸相を理解する上でも重要なテーマの1つである<sup>(17)</sup>。

この思想潮流を研究する上で、その転換点<sup>(18)</sup>ないし基礎となる思想的イデオロギーを打ち立てた人物であるラヴ・クックは最重要人物であると考えられる。そこで本論考では彼の思想についてこれまでどのような解釈がなされてきたかを確認、整理し、今後の研究の一助とする。結論を先取りすると、既存の言説のほとんどは宗教学的な研究というよりも、ユダヤ人やユダヤ教徒による内部の（やや語弊があるかもしれないが神学的な）研究であり、加えてクックの著作が息子のツヴィ・イエフダによる編集を受けていたため、クック自身の思想を分析していたとは言い難い。しかし、近年では研究者および研究領域の幅が広がり、さらに新しい一次資料の出版も相まって宗教学をはじめとした外部の者による研究の展望が開かれつつあるということがいえる。

## 1. クックという人物について：人物と思想、その影響

1865年、ラトビアに生まれたクックは東欧の伝統的なタルムード教育を受けて育ち、一時期はヴオロジン・イエシヴァ<sup>(19)</sup>においても学んだ。彼は1888年からリトアニア北部の町ゼイメリス (Zaumel) のラビとして活動し、そして1904年にパレスチナへと移住するとヤッフオのラビとなった。1914年伝統的なユダヤ人をシオニズムに参与するよう説得するためアグダット・イスラエル<sup>(20)</sup>のカンファレンスに参加しようとヨーロッパへと渡ると、大戦のために帰国が困難になる。そのため第一次世界大戦中はスイス、そしてイギリスで過ごし、イスラエルへと帰還、戦後1921年には初のアシュケナジー首長ラビ<sup>(21)</sup>となり<sup>(22)</sup>、思想家、宗教的指導者として幅広く活躍することとなる。当時のパレスチナはシオニズム運動に影響を受けたユダヤ人が押し寄せる第2次アリヤー(上昇/上京、すなわちイスラエルの地へ上ること。1904-1914年が第2次アリヤーの期間に当たる)<sup>(23)</sup>の真っ只中であつたが、シオニズムに対するオールド・イシューヴ<sup>(24)</sup>のラビたちによる反発も存在していた。というのも、伝統的なユダヤ教の観点からすればユダヤ人が離散の地からイスラエルの地へと帰還し人為的に国家を建設しようとする事、そしてその運動に参与するユダヤ人の多くがユダヤ教の教えを守っていないこと、という事実はまさしく冒険的であつたからである。しかしながら、ラヴ・クックは贖いの始まり (התחלת דגאולה Atchalta De'Geulah) としてシオニズム運動を捉え、ユダヤ・ルネサンスの機会であるとまで考えたのである<sup>(25)</sup>。1935年にクックはこの世を去るが、彼の思想は息子であるツヴィ・イエフダによって展開され、1967年の第3次中東戦争(=六日間戦争)におけるイスラエルの圧勝および領土の拡大と呼応し、聖書に記された土地の獲得にこだわるグーシュ・エムニームに代表される宗教シオニストの入植運動に宗教的・思想的背景を提供することとなった<sup>(26)</sup>。シオニズム運動の初期から現代にかけて、宗教的、そして政治的に強い影響を及ぼしてきたクックの思想は、現代イスラエル(ないしそれ以前のパレスチナにおけるユダヤ人共同体)を理解するためにも、近現代におけるユダヤ教思想を考える上でも、ひいてはシオニズムや宗教ナショナリズムを宗教学的に分析する上でも見過ごすことはできない。

## 2. 研究の黎明期：1980年代～90年代にかけての集積・発展

まずこの節ではクック研究史の中でも大きな展開があつた1980年代から90年代の様子を確認したい。もちろん彼に関する研究が80年代以前に存在していなかったわけではないが、この期間は学術研究が集積・出版され、加えて新資料が刊行されたという意味で研究史上意義のある時代である。シンガー(1996)はクックの研究がなかなか進まなかった原因として、(1)クックの大量の著作が未刊行のまま残っていること、(2)出版の際、無秩序でまとまりのない著作を整理する必要があつたため、息子のツヴィ・イエフダや、弟子のダヴィド・コーヘンによる編集を受けたこと、(3)クックが用いるユダヤ教神秘主義にまつわる用語への十全な理解がなければ彼の著作の読解ができないこと、の3点を挙げている<sup>(27)</sup>。そしてシンガーはその状況を打破した研究としてイーシュニャローム(1993)の *Rav Avraham Itzhak HaCohen Kook* (『ラヴ・アブラハム・イツハク・ハコーヘン・クック』)とカプランら(Kaplan et al., 1995)の *Rabbi Abraham Isaac Kook and Jewish Spirituality* (『ラビ・アブラハム・イサク・クックとユダヤ的霊性』)をクック研究の転換点として提示している<sup>(28)</sup>。これらの著作の出版は90年代であるが、その先駆となるものは80年代から胎動

しており、特にクックの没後 50 年に当たる 1985 年は重要な年であるといえる。次節以降ではまずこの二つの著作およびその出版背景を概観し、80 年代におけるクック研究の隆盛と 90 年代に結実した成果の具体的内容を確認しながら整理していく。

## 2-1. 『ラヴ・アブラハム・イツハク・ハコーヘン・クック』について

この書籍は先にも確認したような様々な研究上の困難を乗り越えつつ、クックの思想を体系的に論じたものとなっており、多くの視座を提供してくれる。まずは著者の情報を確認しよう。イーシュ＝シャロームはグーシュ・エツィオンという入植地のハル・イエツィオン・イエシヴァ<sup>(29)</sup>で教育を受けており、その後 1985 年<sup>(30)</sup> にヘブライ大学でユダヤ思想の博士号を取得した学者・教育者である。この著作は 1984 年にヘブライ大学に提出された博士論文をベースとして 1990 年に出版された *הרב קוק בין רצינוניות למיסטיקה (Ha-Rav Quq (Rav Kook) Beyn Ratsyonalizm le-Mistiqaq)* を英語に翻訳したものであり、その序文によれば彼はハシディズムや神秘主義を専門としていたリブカ・シュツ・ウッフェンハイマーに指導を受けつつ、ヘブライ大学の哲学科教授のナタン・ローテンシュトライヒにサポートされており<sup>(31)</sup>、彼の神秘主義理解や哲学的考察のバックグラウンドが看取される。また、彼のクックへの関心はイエシヴァでの学びに由来するとされ<sup>(32)</sup>、後述するイスラエルでのカンファレンスをまとめた書籍の編集を手がけるなど<sup>(33)</sup>、クック研究者の中でも重要な役割を果たしていた。さらに学術・教育の面で多岐にわたって活躍したことで 2004 年にはアヴィハイ (AVICHAH) 財団<sup>(34)</sup>からアヴィハイ・プライズ (AVICHAH Prize) を受賞している<sup>(35)</sup>。財団との関わりや彼自身のバックグラウンドおよび活動などから、クックという対象との距離に留意する必要はあるが、彼の著作がメシア主義的なシオニストからの反発を招いた<sup>(36)</sup>ことに鑑みれば、一定の距離を保ちながら学術的研究に臨んだといえよう。

### 2-1-1. 『ラヴ・アブラハム・イツハク・ハコーヘン・クック』: 構成と内容

この著作はラヴ・クックの多くのテキストを詳細に分析した上で、西洋哲学や宗教学の理論を用いながら彼の思想に肉薄し、包括的に体系づけた研究史上非常に意義深い書籍である。ヴィッテンベルク大学でユダヤ学を教えるロシェル・L・ミレンは、イーシュ＝シャロームが実存主義の定義を過度に一般化していると批判しながらも、本書の体系的分析を肯定的に評価している<sup>(37)</sup>。本書は大きく分けて 4 部から成る。以下は大まかな内容である。

第 1 部「序 (Introduction)」では本書の導入部として、クックの生い立ちやパレスチナにおけるオールド・イシューヴとニュー・イシューヴの対立、教育内容 (特に語学や世俗的な学問に関して) を巡る宗教陣営の意見の相違といった前提知識、当時の社会的背景について述べられる。

第 2 部「現実と知覚の諸要素 (Elements of Reality and Perception)」では認識論的、存在論的な考察を通して、クックの哲学的思想が検討・整理される。中でも科学を想像力 (imagination) や思弁 (speculation) の下に位置付け、形而上学的な思弁は科学によって廃れないとするクックの考え方が示される。また、創造の全ての側面を発展し続ける啓示であると理解し、無神論や他宗教にも啓示の段階を見出すクックの特殊な啓示概念についても述べられる。

第 3 部「宗教と自由 (Religion and Freedom)」では自由と自己 (self) の問題が扱われ、クックにおいては自己実現の表現として自由が理解される。自由は自己の一つの側面ではなく、「生それ自

体の本質 (essence of life itself)」<sup>(38)</sup>であり、人間の自己探求と神を探求することが同一視され、また神の自己啓示の道具として人は自己を持つと述べられる。この世界観のもと、クックの思想の中ではイスラエル民族は神の意志を実現するための器として働き、イスラエル民族の行動による意志の明示が、神の意志の明示として理解される。

第4部「合理主義と神秘主義のあいだ (Between Rationalism and Mysticism)」ではクックの思想における合理主義と神秘主義がテーマとなる。まず筆者は合理主義と神秘主義を対立軸として描く研究傾向に異議を唱え、ラヴ・クックを合理主義的なカバリスト神秘家として捉える。もちろんクックの思想の中では、神秘的要素が合理的な知に勝るものとして捉えられているが、両者は緊張関係を保ちながら相補的な役割を果たしている。そしてこの緊張関係は、彼の教えの中で「知性」と「意志」の緊張として現れるということが示される。

結論として本書はクックにおける知性と意志（ないしは合理主義と神秘主義）の弁証法的世界観が、存在論だけではなく認識論と倫理観を含めた三つの領域において重要性を持つことを示した。そして同時に論理の限界を超え自己自身、そして知識を拡張する熱望としての「自由」はこの弁証法を通じて実現すると述べられる。本書はクックの一次資料を豊富に用いながら、西洋哲学や宗教学の知見を適用し、比較、検討、考察を加えた意義深いものとなっているが、その一方、未刊行の手稿を、息子のツヴィ・イエフダや弟子によって検閲・出版された資料と同列に扱っている点で実証的な問題を抱えている、ということも指摘できよう。

## 2-2. 学術会議と書籍の出版

クックの没後50年にあたる1985年はイーシュ=シャロームの博論が審査を通過した年であるが、それだけではなく研究史上非常に重要な出来事が起こった年でもある。この年にはクックに関するカンファレンスがそれぞれイスラエルとアメリカで開かれ、これら2つの会議の結果として後に2冊の書籍が出版されている。まずイスラエルに目を向けよう。1985年の8月19日から22日にかけてエルサレムではアヴィハイ財団をスポンサーとしたカンファレンスが開かれている。それには世界シオニスト機構やイスラエルの教育文化省も協力し、オープニングセレモニーは当時のイスラエル大統領、ハイム・ヘルツォグ<sup>(39)</sup>の邸宅で催されるという力の入りようであった<sup>(40)</sup>。このカンファレンスで発表したメンバーを見てみると、ツヴィ・イエフダ・クックの弟子や、グーシュ・エムニームの設立に関わった者<sup>(41)</sup>、すなわち贖いの宗教シオニズム的な傾向の強い信奉者が参加していたこともわかる。そしてこのカンファレンスの内容は1988年に『光のヨベル年<sup>(42)</sup> (גְּבוּל יְוֵל אֹרֹת: Yovel Orot)』としてヘブライ語でまとめられ出版された。さらにこの書籍の英訳 *The World of Rav Kook's Thought* (『ラヴ・クックの思想の世界』) は1991年に出版された。この『ラヴ・クックの思想の世界』は学術書というよりもカンファレンスの記録という性格が強く、また、これからのユダヤ教がどうあるべきかに主眼が置かれている。さらには所収されている論考が必ずしもクックを取り扱っていないということもあり、研究の動向として『ラヴ・クックの思想の世界』を取り上げることはできないが、大まかな構成だけ確認しよう。本書はカンファレンスの開式の言葉やクックの基本的な思想を簡単に説明する導入部で始まり、第1部ではクックがユダヤ教や、外国語をはじめとした一般教養 (general culture) をどのように考えていたかについて、西洋思想、カバラ、美術、ナショナリズムといったテーマから述べられる。第2部ではクックにおける改換

(Teshuvah) が主題となり、ユダヤ教における改悛思想が重点的に語られている。第 3 部ではユダヤ思想再興のためにクックの思想がいかに貢献するのかがテーマとなり、その後のシンポジウムも所収されている。

次にアメリカで行われたカンファレンスを確認しよう。このカンファレンスはクックの直弟子であったラヴ・ヤアコヴ・モシエ・ハルラップの子孫、ラビ・ゼヴルン・ハルラップによって主催され、また、カンファレンスの委員長はイエシヴァ大学の運営に尽力したジェイコブ・ハートシュタインが務めた。詳細な日取りや参加者についての情報は欠けているが、このカンファレンスの後 R・M・セルツァーがカプランらに論集の出版を持ちかけたようである<sup>(43)</sup>。そしてその論集が『ラビ・アブラハム・イサク・クックとユダヤ的靈性』として 1995 年に日の目を見ることとなった<sup>(44)</sup>。この論集は 80 年代後半から 90 年代初頭に書かれた英語およびヘブライ語の論文をはじめ、出版に際して書き下ろされた論文を含んでいる<sup>(45)</sup>。

上記 2 つのカンファレンスが 1985 年に行われ、特にアメリカでは研究者が一堂に会したことで『ラビ・アブラハム・イサク・クックとユダヤ的靈性』のような論文集が編集される契機ともなっており、クックへの関心が高まった研究史上重要な転換点として指摘することができる。

### 2-3. 『ラビ・アブラハム・イサク・クックとユダヤ的靈性』について

『ラビ・アブラハム・イサク・クックとユダヤ的靈性』の中でクックに関して論点となったテーマはどのようなものであろうか？ 同書は大きく 3 部構成となっている。第 1 部「ユダヤ教伝統の多数の潮流とクック」、第 2 部「信仰、文化、多元主義：調和主義の観点」、第 3 部「シオニズム、メシアニズム、イスラエル国」である。第 2 部のタイトルは若干抽象的に見えるが、倫理をはじめとした西洋哲学的な問いに特徴がある。これらのテーマを 3 つに言い換えるとすれば、①ユダヤ教伝統との差異、②世界へのまなざし、③クックのシオニズム観再考というものになろう。以下で本書を整理しながら、具体的にどのような研究が収録されたのかを紹介していく。なお、本論集に寄稿した研究者とその肩書および論文タイトルは脚注に示す。役職は『ラビ・アブラハム・イサク・クックとユダヤ的靈性』に記載されている 1995 年当時のものである。

#### 2-3-1. ①ユダヤ教伝統との差異

クックを論じる際にこのようなトピックが設けられるということは、すなわち彼の思想がユダヤ教の伝統からしてみればある意味では特殊だったということを示しているだろう。さて、このトピックに関して、『ラビ・アブラハム・イサク・クックとユダヤ的靈性』を確認していこう。

ファイン (1995)<sup>(46)</sup> はこれまで論じられることが少なかったクックの神秘主義思想に着目し、それをユダヤ教の神秘主義伝統の中に位置付けようとする。そこで注目するのはクックの認識論、神学的形而上学、目的論の三点であり、その分析を通じてクックの思想をユダヤ神秘主義の新しい形、すなわち「ネオ・カバラ的、そしてネオ・ハシディズム的 (neo-Kabbalistic and neo-Hasidic)」<sup>(47)</sup> であると評している。そこでは世俗ユダヤ人への愛や世俗学問へのオープンな態度が強調され、クックが東欧の厳格な伝統から距離をとっているということが述べられる。カプラン (1995)<sup>(48)</sup> はクックの思想を「全体論的で有機的 (holistic and organic)」<sup>(49)</sup> であるとし、クックのマイモニデスへの態度とその利用の仕方を分析している。そしてフォックス (1995)<sup>(50)</sup> は、クックの思想を「人

工的に構築された体系的な形式 (artificially constructed systematic forms)』<sup>(51)</sup>に当てはめてしまうと、その内的な意味が歪められ、力を失ってしまうと主張し、哲学者でもカバリストでもないものとしてクックの思想を考察している。これらの研究の共通点は、カバラー、ハシディズム、神秘主義などといった枠組みでクックを理解することは難しいと論じた点である。またゲルマン (1995a) <sup>(52)</sup>はクックの詩的な表現を分析しクックの詩人、神秘家としての思想的側面と首長ラビとしての実践的側面の緊張を描き出している。最後にネホライ (1995) <sup>(53)</sup>は彼のハラハー裁定の特殊性を、安息年の規定をはじめとした事例とともに詳述しており、思想に加え実践的な側面においてもクックが伝統的なユダヤ教と乖離した特徴を持っていることを指摘した。

### 2-3-2. ②世界へのまなざし

第2部の論考の方向性をまとめるとすれば、クックが自らを、そしてユダヤ教を当時の世界にどのように関わらせようとしたかを考察するものとなっており、彼が生きた時代や社会背景を考えさせてくれる。

まずラム (1995) <sup>(54)</sup>は論考のなかで 1. 調和主義的アプローチ (harmonistic approach), 2. 新しい物事についての考え (his conception of the new), 3. 聖と俗の関係についての考え (his view of the relations between the sacred and profane) という3つの観点を取り扱う。1点目の調和主義とは、真理への道について対立する考えの差異を乗り越え統一の世界 (World of Unity) を目指すものであり、2点目は新しい考え方がハラハーやアガダー、倫理や道徳の学習に取り入れられるべきであるというクックの思想である。3点目は聖俗二元論とは異なり、完全に俗なるものは存在せず、むしろ聖なるものの中に、俗なるものと至聖 (Holy of Holies) があるという理解である。これらのラディカルな思想がクックのバックグラウンドやユダヤ教の伝統との比較を通じて述べられる。次にイーシュ＝シャローム (1995) <sup>(55)</sup>によればクックにおいて、真実は特定の理論だけでは理解しえないとし、そして全ての現実の側面が神の啓示であるとする2つの考え方から、世俗シオニストや一般教養 (general culture), ひいては様々な宗教への寛容な態度を取ったと説明される。また、カーミー (1995) <sup>(56)</sup>はクックに関する従来の説明を見直しながら、これまでの研究では共同体のリーダーとしてのクックの活動的側面が取り上げられていないことを述べ、彼の手紙の分析を通じて別のクックの理解に取り組む。その一方で息子であるツヴィ・イエフダの検閲とそれを容認したクックのために、クックの真の思想に到達することが難しいと主張する。最後にロス (1995a) <sup>(57)</sup>は「不死 (immortality)」に関する議論を中近世のラビの思想と比較しながら、クックの思想的貢献は、自然的なものと奇跡的なものの区分の不明瞭さを目の前で展開される参与可能な歴史のプロセスへと変化させたこと、そしてそれがなされるためには人々が現実的な問題を精神的な文脈に関連づける必要があると主張したことでであると説明する。

### 2-3-3. ③クックのシオニズム観再考

ツヴィ・イエフダの弟子を中心としたグーシュ・エムニームという集団は、その思想の基礎をクックのメシア主義的思想に置いていた。先述の通りシオニズムはクックの思想の特徴がよく現れるテーマである。『ラビ・アブラハム・イサク・クックとユダヤ的霊性』においてシオニズムとクックはどのように論じられているのだろうか。

ベルファール（1995）<sup>(58)</sup>はシオニズムを贖いの始まりとするクックのメシア観を示しつつも、それはクックにとって「ヨセフの子、メシア」にすぎず、「ダビデの子、メシア」<sup>(59)</sup>による精神的王国到来への道を整えるものとして理解する。そしてクックによるシオニズムの肯定は、革命的で世俗的な特徴を除いた、民族の再興としてのものであるということが述べられる。ゲルマン（1995b）はクックの思想がメルカズ・ハ＝ラヴ・イエシヴァやグーシュ・エムニームなどのイデオロギーに使われていることを確認しながら、クックが展開した「エルサレム連合（Histadrut Jerusalem）」および「エルサレムの旗（Degel Jerusalem）」という二つの「エルサレム運動」に注目する。クックの中では現実的な問題に取り組むシオニズムと、ユダヤ人の内面的な問題に取り組むエルサレミズムの両者が必要であった。加えて、クックにおけるユダヤ国家は目標達成の手段に他ならず、また、クックの思想においては高い道徳的水準が求められ平和的な領土獲得が目指されていたことが述べられ、クックの思想を歪めるものが批判される。ハーヴェイ（1995）<sup>(60)</sup>はシナイ山の麓にまつわるアガダー<sup>(61)</sup>に関して、クックがシオニズムをシナイ山への帰還と同じものとして考えていたということを述べる。すなわち、シオニズム運動においてもユダヤ人はある種強制の下でトーラーを受容しなければならないのである。また、シオニズムとトーラーの関係は、カバラー的な世界観によっても裏打ちされる。クックの思想では口伝トーラーと成文トーラーの結びつきを回復するためにもイスラエルの地への帰還は必須の条件なのであった。さらにハーヴェイは第一次世界大戦後に書かれた“The War”というエッセイを引き、ユダヤ国家が平和裡に達成されるべきとクックは考えていたと主張している。ロス（1995b）はクックが世俗主義の挑戦に直面し、それらを神によって方向付けられたものと考えたことで神学的に寛容・協働を正当化したと説明しながら、クックの思想を今日のイスラエル国家の現状に照らして考察している。

これらの論考は皆ラヴ・クックの平和的、寛容な姿勢やその背景を強調するものとなっており、現代の社会情勢やゲルマン（1995b）が挙げるような特定の集団を念頭に置きつつ、クックの思想を再検討する必要性を提示しているといえる。現代社会についてあまり言及しない『ラヴ・アブラハム・イツハク・ハコーヘン・クック』とはこの観点が大きな違いであろう。

#### 2-4. 補足：翻訳書籍の出版

上記『ラビ・アブラハム・イサク・クックとユダヤ的霊性』などの学術書籍やイスラエルでのカンファレンスをまとめた『ラヴ・クックの思想の世界』が出版されたことと並行して、クックの著作それ自体に対する関心も1980年～90年代にかけて高まっていたといえる。事実、クックの記した手紙のアンソロジーの出版（1986）<sup>(62)</sup>、クックの著作をトピックごとに抜き出しまとめた *The Essential Writings of Abraham Isaac Kook*（『アブラハム・アイザック・クックの重要な作品集』）の翻訳出版（1988）<sup>(63)</sup>、クックの主著である『光（אורות）：アルファベット転写 *Orot*』という著作の翻訳出版（1993）<sup>(64)</sup>などが80～90年代の同時期に起こっており、クックの思想がより広く行き渡るための土壌が形成された。

#### 2-5. まとめ：1980～90年代における研究の始まり

ここまで確認したように、カンファレンスなどを通じて80年代から90年代にかけてクックに関する研究が徐々にまとまり始め、研究書と論集という形でそれらが結実した。『ラヴ・アブラハム・



『イツハク・ハコーヘン・クック』ではクックの思想が様々なトピック、観点から哲学的・体系的に詳述され、『ラビ・アブラハム・イサク・クックとユダヤ的霊性』ではユダヤ教の伝統、世界へのまなざし、シオニズムという3つのテーマによってクックの思想がまとめられた。とりわけ後者の著作の第3部ではクックの寛容さ、平和主義的な側面が前面に打ち出されていたが、そこでは、クックの思想を掲げ入植を進めるグーシュ・エムネームといった集団が念頭に置かれているように考えられる。

### 3. 新しい研究動向

#### 3-1. 近年の傾向① 領域の広がり

最後に近年の傾向を1. 研究の広がり、2. 本来のクックの思想の探求、という観点から確認する。まず前者についてであるが、これまで確認した研究の多くはユダヤ学や、ユダヤ思想研究学者たちによってなされてきた。しかしながら近年の研究では研究の担い手やそのアプローチという点で、研究領域を超え、様々な方面からクックの思想が触れられている。例えば、「イスラエルの地」学 (Land of Israel Studies) や、考古学を専門とするシエメシュ (2016) <sup>(65)</sup> は入植が始まったパレスチナの地におけるユーカーリの植林をテーマとし、それに関するラビの裁定を取り上げながら、クックの思想を論じている。また、開業医であり、テルアビブ大学で医学教育に携わるバルイラン (2004) <sup>(66)</sup> は生命倫理を研究のフィールドとしているが、その中で、これまで論じられることのない <sup>(67)</sup> クックの菜食主義、動物と人間の関係について考察する。他にもバルイラン大学でユダヤ思想を教えるベン＝パズィ (2011) <sup>(68)</sup> はクックの思想における性欲の神学的意味を考察し、マンチェスター大学でユダヤ史の教授を務めるラングトン (2013) <sup>(69)</sup> はクックが進化論を容認した政治的理由を示している。加えて近現代史、思想史を中心に研究するジョハンナ (2016) <sup>(70)</sup> はクックの包括主義における他宗教と世俗主義の序列付けを再検討しながら、クックが世俗化という出来事を脱キリスト教化、すなわち非宗教的ユダヤ人がキリスト教の影響から離れ、ユダヤ教に立ち返る機会として捉えていたことを示した。このような研究者の多様化、研究領域の広がりや議論の先鋭化といった動向はクック研究が興隆していく中で彼自身の多面的な側面を反映したものであると言えるだろう。

#### 3-2. 近年の動向②：新資料の出版と本来のクックの思想の探求

近年のもう1つの動向を概観する前に、研究史上の大きな出来事を確認しよう。先述の通り、そもそもクックに関する研究はテキストの難解さもさることながら資料の問題 (クックの著作の多くがいまだに出版されていない点、出版されているクックの著作が弟子によって検閲・編集を受けているという点) から自由ではなかった。そのような中、クックの記したノートの一部が検閲・編集をほぼ受けない形で1999年に出版されることとなる。これが『8冊の著作集 (שמונה קבצים: アルファベット転写 *Shemonah Qvatsim*)』<sup>(71)</sup> である。『8冊の著作集』にはクックが1904年から1919年にかけて書いたものが収められている。これによって後世の人々がクック本人の記したオリジナルの文章に迫ることが可能となり、既出版された編集を受けた書籍と比較し、編集や検閲の意図、その手法といった側面に関する研究も進むこととなった。これが第2の新しい研究動向である。

ロゼナック (2007) <sup>(72)</sup> はそれらの比較を通して検閲者の意図を示し、クックの生前には、著者であるクックを周囲からの攻撃より守るため、そして彼の死後はその教えを受け取る者たちが、その思想を理解出来るほど十分に成熟していないために検閲・削除を行ったことを示している。そしてまたテキストの比較からクックの思想が歴史的に変化したことも暴き出した。同様にエッカーマン (2017) <sup>(73)</sup> は『8冊の著作集』を用いながら、ブレンネル事件 (Brenner Affair) <sup>(74)</sup> を巡ってのクックの態度と弟子たちの期待の齟齬を描き出している。そこでは、ブレンネル事件に関して口をつぐむクックに対し、弟子たちがクックの思想をその事件に積極的に関わらせようとしているのであった。また『8冊の著作集』の発見とは直接関わらないが、新資料を用いた研究としてバラク (2015) <sup>(75)</sup> の論文を挙げることもできる。彼は 1930 年に書かれたツヴィの手紙を個人的に発見し、ローゼンツヴァイクに対するクックの態度をその中の記述から理解しようと試みている。いずれにせよ、出版されていない手稿や著作が発見、分析されていく中でクックが実際に何を考えて執筆していたのか、という大きな問いについて徐々に明らかになっていく傾向がある。

#### 4. 結び

ここまでクックの研究に関して確認してきたが、その多くはパレスチナに移住したのち (1904 年以降) に公に (ないし個人的に) 書き記されたクックの思想を取り扱っている。一方で、彼はやはり東欧ユダヤ教の伝統から多大な影響を受けているはずである。この状況を埋め合わせてくれる最新の研究として期待できるのは 2020 年夏に出版が予定されている Y・ミルスキーによる *Rav Kook's Formative Years in Eastern Europe, 1865-1904* (『東欧におけるラヴ・クックの形成期, 1865-1904』) である。アリヤー以前のクックの書き記したものがどこまで利用可能なのか定かではないが、クックの思想を生み出した東ヨーロッパでの教育や社会的状況を考えることも重要であり、そしてそれは東欧ユダヤ教の伝統がいかにシオニズム、イスラエル国家へと繋がっていくかを示す 1 つの道筋ともなり得るだろう。

そしてまた近年、クックへの関心が再び高まっている。それは *Orot* (『光』) の英語への再翻訳 (2015) <sup>(76)</sup>、*Orot Teshuva* (『改悛の光』) の英語への翻訳 (2017) <sup>(77)</sup> など、クックの思想が近年繰り返し翻訳されていることによっても裏打ちされる。これはアメリカやイスラエルにおける英語を母語とするユダヤ人を対象としたものだと考えられるが、クックの思想の広がりとはそれだけにとどまらない。2006 年にはロシア語でクックに関する本が書かれており<sup>(78)</sup>、さらにはそれが縮約版として 2009 年には英語に翻訳出版されている<sup>(79)</sup>。本論考で確認したように、特に 2000 年以降は新資料の出版が起り、様々な研究領域、テーマからクックが論じられるようになったこと、加えてクックの著作へのアクセスが翻訳を通じて容易になっていく傾向があり、今後の研究の発展が期待される。

#### 註

- (1) 市川 (2009), 159-163.
- (2) ヘルツルはパレスチナ獲得を諦め、周辺地域の支配者であったイギリスと交渉を重ねていた。

チェンバレンとの会談においてエル・アリシュ案（シナイ半島のエル・アリシュをユダヤ人の入植のための土地とする案）が事実上受け入れられたが、給水が困難であるという理由からこの案は暗礁に乗り上げる。翌 1903 年にはイギリスの植民相がアフリカの一部を提供することを提案した（いわゆるウガンダ案、実際の場所は東アフリカ）。ヘルツルはウガンダ案を当面の間拒否したがロシアのポグロムなどを受け、これを受諾せざるを得なかった。結局、この案は東欧シオニストたちの反対にあい、また現地の悲観的な調査報告を受けて廃案となった。近藤（2006）、174-175。

- (3) 近藤（2006）、173.
- (4) 本論考では触れることはできないが、「ポアレイ・ツィオン」に代表される社会主義シオニズム、そしてそこから派生した労働シオニズム、また、ロシアシオニスト機構の中枢に位置し、「パレスチナでの入植とディアスポラでの活動とを『総合する (synthesize)』という方向性を打ち出した」総合シオニズムといった潮流も存在した。鶴見（2011）、32-34.
- (5) 改革派の西欧ユダヤ人にとってユダヤ教は宗教、ナショナリティはそれぞれの国家に属するため、シオニズムのように「ユダヤ人＝民族」とする思想は国民としての彼らの地位を危うくするものであった。また、正統派の視点では救済を人為的に早めるシオニズムは冒瀆的であり、ラビたちは聖典の言葉を引いてシオニズムを拒否した。市川（2009）、160-163 を参照。
- (6) グーシュ・エムニームは「信心深い者の連合 (The bloc of the faithful)」という名の政治的精神的活動集団であり、1974 年にクファル・エツィオンにて結成。彼らはヨルダン以西（ヨルダン川西岸やガザ、ゴラン高原）への完全な入植によって始まりつつある贖いが達成されると信じていた。そしてジューデア・サマリア地方の支配を神によって命じられたものとし、いかなる理由によっても同地方からの撤退はあり得ないとまで考えていた。また、キャンプ・デービッド合意によるシナイ半島の返還に際して、それが西岸地域の入植地からの撤退に繋がるものと考え、メンバーはシナイ半島北部のヤミット (Yamit) に最後まで留まり続けるなど、強固な一面も持ち合わせていた。構成員はクックの設立したイェンヴァの子弟や信仰心を持つ入植者、国家宗教党 (National Religious Party) の黨員などからなる。 *Encyclopedia Judaica* (以下 E.J と表記する), vol.8, 143-144.
- (7) とはいえ、「初期の宗教的シオニズム」という言い回しからもその射程はツヴィやグーシュ・エムニームに連なるものだけではない。池田（1991）、167-168 を参照。
- (8) 立山（2018）、20.
- (9) 赤尾ら（2011）、21.
- (10) 今野（2015）、66. 1967 年戦争とは六日間戦争、すなわち第三次中東戦争のことを指す。
- (11) Holzer (2002)、77-78.
- (12) E.J., vol.17, 208.
- (13) 今野（2011）によれば、贖いを進めるステップとしてユダヤ人のイスラエルへの帰還・定住が必要だとする考え方は「活動的メシア主義」と呼ばれる。今野（2011）、215.  
そこで本稿では分析概念として「活動的メシア主義シオニズム」という用語を用いる。
- (14) Eisen R. (2011)、176.
- (15) Fischer S. et al. (2016)、137-138. フィッシャーによる論文の注にも記載されているように、

Religious Zionist が意味するところは National Religious と同義であり、「活動的メシア主義シオニズム」の系譜に位置付けられると筆者は考えている。

- (16) *Ibid.*, 137-138.
- (17) 赤尾ら(2011)は、占領地のフロンティアで活動する宗教シオニストが、ユダヤ教とシオニズムの関係を考えるための不可欠の題材の一つだと述べている。赤尾ら (2011), 21.
- (18) もちろん、クック以前にもイスラエルへの入植を宗教的に意味付ける思想家はわずかに存在したが、全くメインストリームではなかった。今野 (2011)は後にグーシュ・エムニームの指導者となる青年が抱くイデオロギーを「ラビ・クック親子を介したシオニズムの先駆者による活動的メシア主義の復活」と評しており、それゆえそのイデオロギーの思想的基盤を息子のツヴィ・イエフダに提供したクックは研究される価値がある。今野 (2011), 218.
- (19) ヴィルナのガオン (ユダヤ教の一時代を作った偉大な指導者) の一番弟子であるヴォロジン・ハイムが建てたイエシヴァ。伝統的なタルムード学習が特徴的。市川 (2009), 170-171.
- (20) Agudat Israel とは、ハラハー (ユダヤ法) の遵守によって正統派の伝統を守ろうとする国際的な政治組織。改革派やシオニズム、ブンド (ロシア支配地域にて活動したユダヤ系社会主義団体) などへの対抗が目指され、第 10 回国際シオニスト機構が文化的活動をそのプログラムに入れたことが最後の一押しとなり、結党された。E.J., vol.1, 505.
- (21) 首長ラビとは、ユダヤ教徒のコミュニティを管理するために権威を与えられた代表者のことを言う。イギリス統治下のパレスチナの地においてはセファルディーの首長ラビとアシケナジーの首長ラビの 2 人が法的な地位を与えられた。E.J., vol.4, 613.
- (22) E.J., vol.12, 289-290.
- (23) 市川 (2009), 228.
- (24) 第一次アリヤーの始まる 1882 年以前からオスマン帝国下のパレスチナに暮らしていたユダヤ教徒の集団。イシューヴは入植地という意味であり、アリヤー以降パレスチナに移住したユダヤ人たちをニュー・イシューヴと呼ぶ。Shilo, M. "Old Yishuv: Palestine at the End of the Ottoman Period" を参照。https://jwa.org/encyclopedia/article/old-yishuv-palestine-at-end-of-ottoman-period (最終閲覧 2020/01/27)
- (25) E.J., vol.12, 290-292.
- (26) E.J., vol.12, 293.
- (27) Singer (1996), 7-8.
- (28) *Ibid.*, 8-12.
- (29) ラビ・イエフダ・アミタルによって入植地に設立されたイエシヴァである。アミタルはイエシヴァでの教育とイスラエルの兵役を並行出来るプログラム、ヘスデル・イエシヴァを立案、実施し、ユダヤ教正統派の若者がイスラエル国防軍へ参入する道筋をつけたが、このハル・イエツィオン・イエシヴァもヘスデル・イエシヴァとして開かれた。Israel Ministry of Foreign Affairs, "Rabbi Yehuda Amital"を参照。https://mfa.gov.il/MFA/MFA-Archive/1998/Pages/Rabbi%20Yehuda%20Amital.aspx (最終閲覧 2020/01/27)
- (30) "רשימת פרסומים של פרופסור איש שלום". פרופ' בנימין איש שלום, בית מורשה. https://bmj.org.il/%D7%90%D7%95%D7%93%D7%95%D7%AA/%D7%A4%D7%A8%D7%9

5%D7%A4%D7%B3-%D7%91%D7%A0%D7%99%D7%9E%D7%99%D7%9F-%D7%90%D7%99%D7%A9-%D7%A9%D7%9C%D7%95%D7%9D/ (最終閲覧 2020/01/26) 上記は彼の研究業績が挙げられているページである。博士号を取得した年は後述するようにクックの死後 50 年に当たる年でもある。

- (31) Ish-Shalom (1993), xiv.
- (32) *Ibid.*, xiv
- (33) イーシュ=シャロームは 1988 年に出版された『光のヨベル年 (יובל אורות: *Yovel Orot*)』の編者でもある。
- (34) クックの思想を信奉するアメリカの財団である。Avi Chai ‘Mission’を参照。https://avichai.org/about-us/81-2/ (最終閲覧 2020/01/26) また、のちに確認するクックの死後 50 年を記念するカンファレンスをイスラエルで開催した団体でもある。
- (35) Avi Chai (2004), ‘THE AVI CHAI PRIZE 2004.’イーシュ=シャロームのキャリアや彼の業績、そしてこの Avi Chai Prize に認定された理由などを英語とヘブライ語で確認することが出来る。https://www.avichai.org.il/sites/default/files/AVI-CHAI-Prize-5764-ish-shalom\_0.pdf (最終閲覧 2020/01/26)
- (36) Singer (1996), 7-8.
- (37) Millen (1996), 216-219.
- (38) Ish-Shalom (1993), 101.
- (39) Chaim Herzog (1918-1997). 1918 年アイルランド生まれ、1936 年にイスラエルへ移住すると 1938 年までハガナー (現イスラエル国防軍の基礎となった、ユダヤ人による軍事組織)、その後はイギリス軍に参加し第二次世界大戦で従軍。その後イスラエル独立戦争に参加、イスラエル建国後もイスラエルの諜報機関に所属。1967 年の六日間戦争において、イスラエルで最も有名な司令官となった。1981 年に政界へ参入し労働党のメンバーとなった。1983 年にイスラエルの首相として任命され、10 年間その地位を務めた。E.J., vol.9, 67.
- (40) Ish-Shalom et al. (1991), viii.
- (41) イェホシュア・ズッカーマンやヨエル・ベン・ヌンなど。
- (42) ヨベルの年とは、50 年周期で祝われる安息年のことである。長窪 (2008), 552.
- (43) Kaplan et al. (1995), vii. ちなみにセルツァーは当時ハンターカレッジ教授であり、ニューヨーク大学出版の編集者だったようである。
- (44) 謝辞にはアメリカで開かれたクックに関する二つのカンファレンスの後、ロバート・セルツァーからの提案があったことが述べられている。Kaplan et al. (1995), vii.
- (45) Kaplan et al. (1995), vii-viii. ちなみに本書ではヘブライ語の論文は英語に翻訳され所収されている。
- (46) Fine, L. マウントホリヨーク大学のユダヤ学教授、カバラーが専門。論文名は Fine (1995) “Rav Abraham Isaac Kook and Jewish Mystical Tradition” (第 1 部)。
- (47) Kaplan et al. (1995), 37.
- (48) Kaplan, L. J. マックギル大学ユダヤ学科准教授、ユダヤ哲学が専門。論文名“Rav Kook and the Jewish Philosophical Tradition” (第 1 部)。

- (49) Kaplan et al. (1995), 41.
- (50) Fox, M. ブランダイス大学にてユダヤ哲学の名誉教授。論文名は“Rav Kook: Neither Philosopher nor Kabbalist” (第1部)。
- (51) Kaplan et al. (1995), 78.
- (52) Gellman, J. I. ネゲヴ・ベン＝グリオン大学准教授で哲学を専門とする。宗教哲学, ユダヤ思想が専門。論文名“Poetry of Spiritualit” (第1部: 1995a) および“Zion and Jerusalem: The Jewish State in the Thought of Rabbi Abraham Isaac Kook” (第3部: 1995b)。
- (53) Nehorai, M. Z. バルイラン大学哲学科所属。論文名“Halakha, Metahalakhah, and Redemption of Israel: Reflections on the Rabbinic Rulings of Rav Kook” (第1部)。
- (54) Lamm, N. イェシヴァ大学学長, ユダヤ哲学の教授。論文名“Harmonism, Novelty, and the Sacred in the Teachings of Rav Kook” (第2部)。
- (55) Ish-Shalom, B. ヘブライ大学講師。論文名“Tolerance and Its Theoretical Basis in the Teaching of Rav Kook” (第2部)。
- (56) Carmy, S. イェシヴァ大学にてユダヤ学, 哲学を教える。論文名は“Dialectic Doubters, and a Self-Erasing Letter: Rav Kook and the Ethics of Belief” (第2部)。
- (57) Ross, T. バルイラン大学哲学科講師, 16世紀以降のユダヤ思想が専門。論文タイトル“Immortality, Natural Law, and the Role of Human Perception in the Writings of Rav Kook” (第1部: 1995a) および“What Would Rav Kook Have to Say about the State of Israel Today?” (第3部: 1995b)。
- (58) Belfer, E. バルイラン大学政治学科長, 准教授。論文名“The Land of Israel and Historical Dialectics in the thought of Rav Kook: Zionism and Messianism” (第3部)。
- (59) Harvey, W. Z. ヘブライ大学准教授でユダヤ思想を専門。論文名は“Zionism As a Return to Mount Sinai in Rabbi Kook's Thought” (第3部)。
- (60) バビロニア・タルムードの”Sukkah 52a”では「ダビデの子, メシア」とともに到来する贖いの前触れとして, 邪悪な性向 (evil inclination) としての「ヨセフの子, メシア」が殺されるという記述がある。
- (61) 出エジプト記 19:17 にまつわるもの。シナイ山の麓は原文では「シナイ山の下」とも解釈できる単語であり, そのため神が山の上部をひっくり返しイスラエルの民に対してトーラーを受け取らないのであればそこが墓場となる, と脅したという話がある (バビロニア・タルムード, ”Shabbat 88a”)。
- (62) Kook, A., translated and annotated by Feldman, Z., *Rav A.Y. Kook: selected letters*, Ma'aleh Adumim, Israel: Ma'aliot Publications of Yeshivat Birkat Moshe, 1986.
- (63) Kook, A., edited and translated by Bosker, Ben Z., *The Essential Writings of Abraham Isaac Kook*, New York: Amity House. 1988.
- (64) Kook, A., translated by Naor, Rabbi B., *Orot*, Northvale: Jason Aronson, 1993.
- (65) Shemesh (2016)を参照。
- (66) Barilan (2004)を参照。
- (67) Barilan (2004), 73.

- (68) Ben-Pazi (2011)を参照
- (69) Langton (2013)を参照。
- (70) Johanan (2016)を参照。
- (71) 新資料出版の経緯については以下を参照。Findel, H. 'Rav Kook's Secret Writings: A Drama In Several Part,' Jewish Press, <https://www.jewishpress.com/indepth/interviews-and-profiles/rav-kooks-secret-writings-a-drama-in-several-parts/2012/10/04/> (最終閲覧 2020/01/27)
- (72) Rozenak (2007)を参照。
- (73) Ackerman (2017)を参照
- (74) ブレンネルが、アハド・ハアムによるユダヤ教とキリスト教の相違に関する論考を批判し、宗教というものがユダヤ青年の間では意味を持たず、そして新しいユダヤ人がキリスト教に関係するような精神的理想に同一化することも自由に出来ると論じたことで巻き起こった論争である。鶴見 (2012), 171-172.
- (75) Barak (2015)を参照。
- (76) Kook, A., translated by Naor, Rabbi B., *Orot*, New Milford: Maggid Books. 2015.
- (77) Kook, A., translated by Shulman, Y. D., *Lights of Teshuvah*, Lexington: CreateSpace Independent Publishing Platform. 2017.
- (78) Полонский. П. *Рав Авраам-Ицхак Кук. Личность и учение*. Маханаим-Бейт аРав, 2006. (Polonsky, P., *Rabbi Kook, the Man and his Teaching*, Jerusalem: Machanaim. 2006.) この書籍はロシア語で書かれた宗教シオニズムおよびクックに関する初めてのものであるようだ。Pinchas Polonsky (2009), 13.
- (79) Polonsky, P., translated by Brody, L, *Religious Zionism of Rav Kook*, Jerusalem: Machanim, 2009.

## 参考文献

(日本語)

- 赤尾光春・早尾貴紀著「シオニズムを解剖する」(白杵陽監修『シオニズムの解剖——現代ユダヤ世界におけるディアスポラとイスラエルの相克』, 人文書院, 2011年, 7-28)
- 池田明史「6章 イスラエル政軍関係と聖俗問題——「イスラエル国防軍」と「ユダヤ防衛軍」の狭間」(『平成 29 年度外務省外交・安全保障調査研究事業 反グローバリズム再考——国際経済秩序を揺るがす危機要因の研究——グローバルリスク研究』, 日本国際問題研究所, 2018年, 85-96)
- 市川裕『ユダヤ教の歴史』山川出版社, 2009年
- 今野泰三「死と贖いの文化——フロンティアのメシア主義者」(白杵陽監修『シオニズムの解剖——現代ユダヤ世界におけるディアスポラとイスラエルの相克』人文書院, 2011年, 212-232)
- 今野泰三「宗教シオニズムの越境——ヨルダン川西岸地区の「混住入植地」を事例として」(『境界研究』5, 北海道大学, 2015年, 57-98)
- 近藤申一著「現代編 I シオニズム運動」(ユダヤ大辞典編纂委員会編『ユダヤ大辞典』荒地出版社, 2006年, 169-183)

- 立山良司「拡大するシオニズムの宗教的側面——イスラエルにおける政教関係の変化」(『国際問題』 675, 日本国際問題研究所, 2018年, 18-28)
- 鶴見太郎「忘れられた世代と場所——「長い十九世紀」最後のロシア・シオニズム」(白杵陽監修『シオニズムの解剖——現代ユダヤ世界におけるディアスポラとイスラエルの相克』所収, 人文書院, 2011年, 30-51)
- 鶴見太郎『ロシア・シオニズムの想像力——ユダヤ人・帝国・パレスチナ』東京大学出版会, 2012年
- 長窪専三『古典ユダヤ教辞典』教文館, 2008年

(英語)

- Ackerman, A. “R. Abraham Isaac ha-Kohen Kook and the Brenner Affair,” *Shofar: An Interdisciplinary Journal of Jewish Studies*. 35(3). 2017. 99-113.
- Barak, U. “Kabbalah versus Philosophy: Rabbi Avraham Itzhak Kook’s Critique of the Spiritual World of Franz Rosenzweig,” *The Journal of Jewish Thought and Philosophy*. 23(1). 2015. 27-59.
- Barilan, Y. M. “The Vision of Vegetarianism and Peace: Rabbi Kook on the Ethical Treatment of Animals,” *Journal of Diagnostic Medical Sonography*. 17(4). 2004. 193-198.
- Ben-Pazi, H. “Holiness Streams toward the Future: Sexuality in Rav Kook’s Thought,” *Nashim: A Journal of Jewish Women’s Studies & Gender Issues*. 21. 2011. 160-178.
- Eisen R. *The Peace and Violence of Judaism: From the Bible to Modern Zionism*, Oxford: Oxford University Press. 2011.
- Fischer S. et al. “Religious Zionism in Israel Today: Toward the Center,” *Annual Assessment 2016*, 2016. 137-152.
- Holzer E. “The Use of Military Force in the Religious-Zionist Ideology of Rabbi Jacob Reines and his Successors,” *Studies in Contemporary Jewry*. 18. 2002. 74-94.
- Ish-Shalom, B., translated by Wiskind-Elper, O., *Rav Avraham Itzhak Hakohen Kook: Between Rationalism and Mysticism*, New York: State University of New York Press. 1993.
- Ish-Shalom, B. et al. *The World of Rav Kook’s Thought*. translated by Carmy, S. Jerusalem: Avi Chai. 1991.
- Johanan, K.B. “Wreaking Judgment on Mount Esau: Christianity in R. Kook’s Thought,” *Jewish Quarterly Review* 106(1). 2016. 76-100.
- Kaplan, J.K. et al. *Rabbi Abraham Isaac Kook and Jewish Spirituality*, New York: New York University Press. 1995. 以下本書の構成である。

第1部

- ファイン (1995) “Rav Abraham Isaac Kook and Jewish Mystical Tradition,” 23-40.
- カプラン (1995) “Rav Kook and the Jewish Philosophical Tradition,” 41-77.
- フォックス (1995) “Rav Kook: Neither Philosopher nor Kabbalist,” 78-87.
- ゲルマン (1995a) “Poetry of Spirituality,” 88-119.



ネホライ (1995) “Halakha, Metahalakhah, and Redemption of Israel: Reflections on the Rabbinic Rulings of Rav Kook,” 120-156.

第2部

ラム (1995) “Harmonism, Novelty, and the Sacred in the Teachings of Rav Kook,” 159-177.

イーシュ=シャローム (1995) “Tolerance and Its Theoretical Basis in the Teaching of Rav Kook,” 178-204.

カーミー (1995) “Dialectic Doubters, and a Self-Erasing Letter: Rav Kook and the Ethics of Belief,” 205-236.

ロス (1995a) “Immortality, Natural Law, and the Role of Human Perception in the Writings of Rav Kook,” 237-253.

第3部

ベルフアー (1995) “The Land of Israel and Historical Dialectics in the thought of Rav Kook: Zionism and Messianism”, 257-275.

ゲルマン (1995b) “Zion and Jerusalem: The Jewish State in the Thought of Rabbi Abraham Isaac Kook”, 276-289.

ハーヴェイ (1995) “Zionism As a Return to Mount Sinai in Rabbi Kook’s Thought” 290-300.

ロス (1995b) “What Would Rav Kook Have to Say about the State of Israel Today?,” 301-307.

以上。

Langton, D. “Abraham Isaac Kook’s Account of ‘Creative Evolution’: A Response to Modernity for the Sake of Zion,” *Melilah: Manchester Journal of Jewish Studies*. 10. 2013. 1-11.

Millen, R.L. “Review, Rav Avraham Itzhak HaCohen Kook: Between Mysticism and Rationalism by Benjamin Ish-Shalom,” *AJS Review*. 21(1). 1996. 216-219.

Polonsky, P., translated by Brody, L., *Religious Zionism of Rav Kook*, Jerusalem: Machanim. 2009.

Rozenak, A. “Hidden Diaries and New Discoveries: The Life and Thought of Rabbi A. I. Kook,” *Shofar: An Interdisciplinary Journal of Jewish Studies* 25(3). 2007. 111-147.

Shemesh, A. O. “Planting Eucalyptus Trees in the New Settlements in Nineteenth- to Twentieth-Century Palestine as Reflected in Rabbinic Documents,” *Modern Judaism - A Journal of Jewish Ideas and Experience*. 36(1). 2016. 83-99.

Singer, D. “Rav Kook’s Contested Legacy.” *Tradition: A Journal of Orthodox Jewish Thought*. 30(3). 1996. 6-20.

Skolnik, Fred et al. *Encyclopedia Judaica. 2nd edition*. Detroit: Macmillan Reference USA. 2007.

(インターネットサイトなど)

Avi Chai, ‘Mission.’ <https://avichai.org/about-us/81-2/> (最終閲覧 2020/01/26)

Avi Chai. ‘THE AVI CHAI PRIZE 2004.’ 2004. <https://www.avichai.org.il/sites/default/files/A>

VI-CHAI-Prize-5764-ish-shalom\_0.pdf (最終閱覽 2020/01/26)

Findel, H. 'Rav Kook's Secret Writings: A Drama In Several Parts.' Jewish Press, 2012/10/4. <https://www.jewishpress.com/indepth/interviews-and-profiles/rav-kooks-secret-writings-a-drama-in-several-parts/2012/10/04/> (最終閱覽 2020/01/30)

Israel Ministry of Foreign Affairs. 'Rabbi Yehuda Amita.' <https://mfa.gov.il/MFA/MFA-Archive/1998/Pages/Rabbi%20Yehuda%20Amital.aspx> (最終閱覽 2020/01/27)

Shilo, M. 'Old Yishuv: Palestine at the End of the Ottoman Period.' <https://jwa.org/encyclopedia/article/old-yishuv-palestine-at-end-of-ottoman-period> (最終閱覽 2020/01/27)

. "רשימת פרסומים של פרופסור איש שלום". פרופ' בינימין איש שלום, בית מורשה. <https://bmj.org.il/%D7%90%D7%95%D7%93%D7%95%D7%AA/%D7%A4%D7%A8%D7%95%D7%A4%D7%B3-%D7%91%D7%A0%D7%99%D7%9E%D7%99%D7%9F-%D7%90%D7%99%D7%A9-%D7%A9%D7%9C%D7%95%D7%9D/> (最終閱覽 2020/01/26)